因幡の白兎考

「週末寸言」　050423

「古事記」に登場する因幡の白兎、海を渡って対岸の気多の前まで行きたいのだが泳げない。そこで、「吾と汝と競ひて、族の多き少きを計へむ。」などと、わに（サメのことで、今でも山陰地方ではこう呼ぶそうだ）に声をかけた。ノーテンキなわにの一族は言われるままに海中に並ぶ。兎は彼らの背の上をぴょんぴょんと渡って行った。

ところが、「今地に下りむとせし時、吾云ひつらく、『汝は吾に欺かえぬ』と言ひ竟ふる即ち、いや端に伏せるわに、吾を捕へ、悉吾が衣服を剥ぎき。」というわけで、成功を目前にしながら皮をむかれて赤裸にされてしまった。悪いことはできないものだ。

人間世界にも、この白兎同様、お人好しのわにを騙してむこう岸に渡ってしまうような悪党がうんざりするほど沢山いる。ところが彼らは、白兎のように、「汝は吾に欺かえぬ」などとは決して言わない。己の悪しき意図などまるで無かったような顔をして、挨拶もせずに去っていく。

前後不覚に酩酊し、通行中のご婦人に悪しき行為に及んだとして現行犯逮捕された代議士がいた。苦痛の解放者としての優位な立場を利して弱い女性患者に性的嫌がらせを行っていた大病院のセクハラ医者。彼らは、「私は世界で一番誠実な人間です」というような顔をして人生をやり過ごそうとしていたに違いない。

その彼らが晴天白日の下に曝け出されたのは他でもない。「天網恢恢、疎にして漏らさず」。天の神が巧妙に張っておいた非常線に引っかかって、ついに捕縛されたというわけだ。まことに恐るべきは天の業である。

それにしても、人を欺いて向こう岸に渡ろうとする「白兎」が、何ゆえにかくも沢山いるのだろうか。因幡の白兎に関する「古事記」の記述は、「大国主命」の優しさを讃えるためであった。そこで、彼の非情な兄達八十神の不親切をなじるに忙しく、白兎の悪事を叱らなかった。そのことが、この国で、後々多くの「白兎」を輩出した原因になったのではないだろうか。

つい数日前のこと。縁側でうたた寝をしていると、春の陽に浮かれたか、一匹の兎が、わが家の池のほとりに迷い込んできた。大急ぎで玄関から出て行ってみると、脱兎の如し、雲を霞と消えていた。後に黒豆のような糞が十数個。池の鯉達はきょとんとした顔をして一列に並んで泳いでいた。ははは、ノーテンキな鯉達を騙して池を渡ってきたか？

春の異動シーズン。せいぜい面倒を見てやったのに何食わぬ顔して向こう岸に渡ってしまう脱兎がいるかもしれない。クワバラクワバラ。